

英文学における諷刺

(一)

——諷刺の性格について——

太田藤一郎

(一)

社会の不正や悪徳をにくむ立場において形象化される作品は、悲観的、厭世的、或は諷刺的な傾向をおびるものであるが、人生の不正や悪徳をにくむというこの行為には、まづ批判性がともなわれなければならない。何故ならば斯様な不正や悪徳が、果してその社会機構の奥深くまで根を下ろし、そしてその影響が表面にまでにじみ出ているといったように本質的なものであるか、それともまたその悪は本質的なものではなくて、たゞ單に表面的な偽装的なものであつて、本質的には善であるか、そのいづれとも外見的には識別の困難なことがあるからである。したがつて人生の不正や悪徳を明確に肯定するか、それとも否定するか、そのいづれかの態度を決定する場合には、鋭利な批判の眼が必要であることは明かなことである。そして世相をにくむ場合、過去の世相をにくみ攻撃する強さと、現在の世相をにくみ攻撃する強さとを比較してみると、過去をにくんだり、未来を悲観したりするよりも、現在の世相にたいするにくしみの感情の方が最も激しい。それは現在の社会の不正や悪徳は、直接体験されるところの全く身近かなものであり、その効果影響は痛切な刺戟をあたえるからである。現実の社会の不正から眼をそむけて逃避しない限り、そして現実生活にたいして真摯な愛情を抱く限り、もし現実の生活に不正や悪徳が存在しているとすれば、にくしみと怒りが誘發される

のは当然のことであつて、このにくしみと怒りの感情は現実生活への愛情と関心とから生れ出てくる感情である。現実生活の正しい面を肯定し、これを支持していくところの正義にたいする愛情が強ければそれだけ、逆に現実生活の不正や悪徳にたいしては、これを否定し排斥するという怒りやにくしみの感情も強いものである。現在の世相にたいするにくしみや怒りの感情が過去や未来のそれにくらべて、最も激しいものであり、世相にたいするこのような怒りが諷刺的な傾向をおびさせるものであるとすると、諷刺というものは現在性即ち現在のな性格をもつものであるということが考えられる。

以上の観点から吾々が把握出来ることは、諷刺家は現実社会の本質的な様相を見抜くことの出来る批判性を持ち、現実社会の不正をにくみ怒る感情と、正しさを愛する愛情をもたなければならぬということである。諷刺家をして筆をとらせるものは、人生の不正、非行にたいする憎悪、憤激であると同時に、正義にたいする限らない愛情である。この点において諷刺家は予言者と世界を同じくするものであるが、諷刺家は美德というものを楯としてではなく、悪徳を楯にして人間の心を動かそうと努力するのである。諷刺というものはこのように世相にたいする不満足を表明する否定的批評の文学である。

諷刺の文学は人生の悪徳、不正にたいする攻撃の様式即ち否定の様式をとる文芸形態であつて、感情の世界からいうならば、それは怒りの文学であり、憎しみの文学であると言へるであらう。即ち作者が人生の不正、悪徳の対象に直面して、これらの対象から作者があたえられる感情は、この対象を激しく否定するところの情熱であり、怒りの感情であり、憎悪の感情である。それ故諷刺の文学の内面を構成し支えるものはこれらの憎悪の感情であることがわかる。そして作者はこれらの感情に刺戟され、これらの感情を形象化するための表現手段として機智を用いる。Hugh Walkerが

“There is satire even in the Bible: ‘No doubt ye are the people, and wisdom will die with you,’ is satirical. In short, satire is almost as old as literature; and each people in turn that develops a literature

develops a satire also."

と彼の *The English Satire and Satirists* の Introduction で言っているように、諷刺や諷刺家は世界の歴史の殆んど凡ゆる時代にみうけられるのであつて、この点から考察してみても、諷刺文学の栄えた時代は理想の時代ではなかつたということがうなづけるのである。世情の安定した時代においては、もしも悲劇や惨事が起つたにしても、そういう事件は社会や人々の考え方の不足から生じたものであると考えるよりはむしろ、それは個人の中にある弱さから生じたものであると容易に信じてしまうのである。それに反して世情の変化の激しい時代は、常にそれは知的動搖の時代であるので、そのような時代においては、何事もその解決は批判的な検討にゆだねられる。その結果悲劇や惨事がその時代の社会制度や因襲的な思想に原因されて生じたものであるということが判明した場合には、社会制度や因襲的な思想を變革しようとする。斯様な變革は当然批判性とむすびつく。そしてこの批判性が諷刺を産むのであつて、歴史的な大變化のあつた時代においては常に諷刺が栄えたという理由もこゝに存するのである。

(II)

諷刺家が人生の不正、悪徳にたいする憎惡の感情を形象化するため、表現手段として用いる主要な手段は、Irony (皮肉) / Lampoon (諷刺詩) / Parody (戯文) / Allegory (諷諭) / Burlesque (滑稽諷刺) / Humour (諧謔) / Sarcasm (冷か) / Invective (毒舌) / Wit (機智) などであつて、現実社会の不正や悪徳にたいする憤りが強ければ強い程、それは諷刺へのより強烈な素因となり、作者の諷刺的な罵言は諷刺的効果をたかめて高い文学水準に達することが出来るのである。世相に密接な關係をもつところの諷刺家の作品は、作者が所屬する時代や、その時代の人間、風習、趣味、思想などの時代精神や、その時代のすがたを完全ではないけれども、しかし生き生きと呈示してくるのである。それ故にこそ諷刺作品は文学的な価値、倫理的な価値とともに、歴史的な価値をもつものであり、その結

果諷刺は文学の枢要な領域の一つとして見做され、優れた才能のある人達によつて育成されてきたのである。

文学の世界において占めている諷刺のこのような位置は、遠く古代ローマ人においてすでに決定づけられてしまつていた。ローマ人は多くの文学形式をギリシヤ人から借りてきたが、諷刺はローマ人の發明したものだと言張してゐた。というのは諷刺の精神というものは、Homer の作品にもみられるように、ギリシヤ文学にもあつたのであるけれども、ギリシヤ人は諷刺にたいする特別な形式というものを持つていなかつたから、ローマ人のこの主張は正しいかもしれない。諷刺が現代人の間に本質的な重要性をもつてゐるが故に、斯様な位置づけをされてゐるという訳ではない。Claude M. Fuess がその著 *Lord Byron as a Satirist in Verse* に於いて

“Broadly speaking, satire comprises any manifestation of the satiric spirit in literature:.....” (P. 2)

と述べてゐるが、諷刺の精神が隨筆、小説の時代は言うに及ばず、抒情詩や抒情詩の榮えた時代においてすら、殆んど凡ゆる文学の様式の中に現れていることは明かなことである。そして個人であろうと団体であろうと或は人類一般にたいしてであろうと、かりにも人生の不正、非行の上に跨つてあぐらをかいてゐる権力にたいする非難攻撃が行われてゐるところの作品にたいして、この特殊な諷刺という名称がつけられた。イギリスの諷刺がローマの詩人から伝承されたものであるということについては、Hugh Walker が

“What may be called the classical satire of England is derived from the satire of the Latin poets; and as the Latin satirists adopted the hexameter, so their English imitators used the English equivalent, the heroic couplet.” (*Op. cit.* Introduction P. vi)

と言つてゐる。

近世のヒューマニズムの黎明をみるまでの中世期に於ては、夥しい諷刺の精神が充滿し、諷刺的な歌謡、寓話、パッサド、抒情詩などが、僧侶を揶揄し、女性の弱点を狙うにあけてゐる。イギリスにおいて合理的に諷刺と呼ばれること

の出来る完全な作品の発見されるのは、ノルマン人のイギリス征服（一〇六六年）後しばらく経つてからである。これらの作品のうち最も初期のものは英語では書かれなかつた。しかしながらその後次第にラテン語やフランス語に代つて、英語が勢力を占め、諷刺作品にも使われるようになった。それで Hugh Walker はイギリスの諷刺は十二世紀に生れたとも言つてゐる。バノックバーンの戦（一二一四年）や百年戦争（一二三三—一四五三年）、またバストの猖獗（一三四八年）や農民一擧（一二三八年）などによつて惹き起された十四世紀イギリスの庶民生活の貧窮や生活不安、或は教会の腐敗墮落は、William Langland (1339?—1400?) をしてその *Piers the Plowman* をと寫して、尼僧の墮落した生活を諷刺させてゐるし、また Geoffrey Chaucer (1340?—1400) をして彼の *Canterbury Tales* の序文におつて、女性の墮落ぶりにたいして諷刺の筆をとらせてゐる。諷刺の精神はさらに William Shakespeare (1534—1616) をして、諷刺的なまたヒューモラスなすぐれた性格を創造せしめてゐる。産業の發達は十七世紀の様相を變え、産業革命はデモクラツシイや市場獲得のための國際的競争などの變化をもたらした。一七〇〇年以前における代表的な諷刺家としては、多くの諷刺家の中から John Dryden (1631—1700) を挙げる事が出来る。彼と同時代の諷刺家たちの作品が粗野で非常に非芸術的であるのに反して、Dryden は斯様な欠点をさけて、洗練された諷刺詩を書いてゐる。彼の諷刺は明晰で上品である。彼は滅多に腹を立てることもなかつたし、また見さかしく嘲弄するということもなかつた。諷刺の眞の目的は惡の矯正であるという見解をとつてゐた。

十七世紀の終りから十八世紀にかけては、散文や詩の立派な諷刺作品が数多く世にとはれ著しい進歩をとけた。それには種々の原因があるが、この新しい時代の精神が次第に合理的且つ實際的になり、その一般的な傾向が学究的、内省的、批判的であつた。そして文学は自らを分析して、その進むべき方向にたいする法則をつくり始めたし、社会は自らの輕佻浮薄と愚行とを嘲笑することに面白さを發見した。この批判精神が破壊的になつた時には、自然とその表現のけ口を諷刺に求めるにいたつたのである。党派感情は當時の文人達をして、ホイッグ党とトーリー党とのいづれかに結

びつけ、党派的な争をつゞけさせた。倶楽部やコーヒー店で機智を鋭くした思想家たちの談話や著書は、主として実際問題や政治的・社会的・生活の特殊な問題を取扱つていた。このような批判的な時代が、その時代精神を明確な具体的な問題を取扱うのに適したところの文学様式である諷刺の中に表現しようとする道をたどつたのは、さして驚くにはあたらなう。

諷刺の鋭鋒をほしいまゝにした十八世紀の Jonathan Swift (1667—1745) は、彼の *A Tale of Tub* によつて、佻佻や文人たちの偽善的な態度、国教反対者、ローマ教徒たちを痛烈に非難するために、諷刺の表現形式をとつてゐる。彼の *A Tale of Tub*, *The Battle of Books*, *Gulliver's Travels* は発表以来今日に到るもなまなま驚嘆とよるこびを読者にあたえつづけている偉大な諷刺散文であり、諷刺、機智、皮肉、揶揄などがするどくそしておしみなく用いられている。文学の一領域に所屬するものとして、また世相にたいする強い否定的態度から出発するところの批判の文学としての諷刺は、移り変る各時代の様相を敏感にかんじとつた諷刺家の批判的な意義、即ち憎悪の感情が、機智や笑いにさゝえられて形象化された表現形式であるが故に、そこにはその時代の文人達の愚かな行爲、奇矯な性質、地位や肩書を得ることに汲々としている銜学者の愚かな態度にたいするからかいがあつたり、社会の不正、悪弊にたいする攻撃が行われることは当然のことである。たとへば *Jacobites* と *Hanoverians* との間に見られた政治的な憎悪の感情は、絶えず諷刺文やとりりの械会をあたえたものである。John Gay (1687—1732) の *The Beggar's Opera* は諷刺歌劇であつて、前首相であり現藏相である Sir Robert Walpole を諷刺してあり、財政政策とか宮廷生活の秘密など、この当時の社会情勢をするどくついでている。またこの時代の商業主義や Sir Robert Walpole を諷刺したところの作品 *The History of Mr. Jonathan Wild the Great* を書きた Henry Fielding (1707—54) は、力強く独創的な特徴をもつた諷刺家であつた。

十八世紀の後半においては、政治的散文諷刺が Junius (一七七二年に出版された *Letters of Junius* の筆者であつ

じ、Gratton 侯、Bedford 侯、Mansfield 卿などを攻撃した。筆者は Burke, Chatham, Chesterfield, Walpole, Gibbon などと臆測されてはいるが、結局 Sir Philip Francis であらうと想像されてゐる）において高潮に達し、十九世紀初期においては政治的諷刺は Byron (1788—1824) において絶頂に達した。Byron は同僚の詩人達や社会の人々の愚かみや、上流階級の不正を嘲笑した。Thomas Love Peacock (1765—1866) は産業主義を手当り次第に攻撃した。そして十九世紀の諷刺文学は、十八世紀のものに比敵する程に榮えるであらうと予想されたけれども、Byron の死後偉大な諷刺作品と見做されるものは Gilbert Frankau (1884—) の *One of Us* のみで、これほど諷刺作品の貧困な時代は十七世紀以来ないことであると Hugh Walker は述べてゐる。けれども吾々は十九世紀のイギリスの文学史において、物質主義や俗物根性、上流階級及び商工業者の俗悪さを攻撃したところの *Vanity Fair*, *The Book of Snobs* の作者 William Makepeace Thackeray (1811—63)、投墮場、養育院、法廷、債務者收容刑務所などの残忍さと恐怖、政府の繁文褥礼、工場組織、貧民階級にたゞする搾取などを激しく攻撃したところの *Sketches by Boz*, *David Copperfield* の作者 Charles Dickens (1812—70)、宗教、道徳、教育界の偽善を痛罵した *Erewhon* の作者 Samuel Butler (1835—1902) をして吾々の生活の速度が加わり、科学は吾々の錯綜した宇宙を赤裸々にし、産業は社会機構を変化さし、経済的闘争を尖鋭化した今世紀の騒音の中にあつて、諷刺は是等の混乱に注意をむけ、是等の社会の混乱状態を透明にすることの必要さを加えた。

この二十世紀においては十九世紀の諷刺文学の伝統、特に Samuel Butler の伝統をいふだところの George Bernard Shaw (1856—1951) をして大戦後の Wyndham Lewis (1886—)、Aldous Huxley (1894—) などの他多くの優れた諷刺作家を発見するのであるが、イギリスの是等の諷刺作家たちは、諷刺は罪惡の暴露であるとの見解を抱いて、古く最初の洗練された諷刺作家として諷刺文学の形式を確立しようとしたところのローマの詩人、Horace (B. C. 65—8) や、或は社会の惡弊を非難攻撃したローマの諷刺詩人 Juvenal (60—130) の流れをくみ、その継承者として、

各時代に培われた伝統を相継ぎ相伝えて、近代庶民文学のなかに諷刺の性格を理論づけるにいたつたのである。

(三)

作者が諷刺によつて人生にたいする憂を晴らそうとする場合、その動機を分析してみると、その第一は諷刺の対象にされた人物や社会の状態を、不正や悪徳から善なる状態に移らせてやろうとする好意的なもの、第二は当人の感情を徹底的に傷け嘲罵し去つて、その後で舌を出しているといった惡意的なもの、第三は好意的、惡意的そのいづれでもない、ただ諷刺するという行為そのものに興味があるので諷刺するといったような相違が認められるであろう。例えば、

Edgar Johnson は次の唄

The coffee in the Army

Is very, very fine:

It's good for cuts and bruises

And it tastes like iodine——

を引例して、鋭い言葉、精妙な言葉、皮肉な言葉の中に諷刺の味がひそんでいるとして、アメリカの兵隊が作った小唄を示しているが、この小唄には好意的、惡意的そのいづれでもない、諷刺すること自体が面白いので諷刺するといった調子を感じられる。諷刺のしかたには、機智や諧謔のなかに面白可笑しく諷刺する場合や、それとは反対に当人の骨肉を刺しつらぬくように、峻烈にやつつけてしまうというような場合もあるが、いづれにしても読者が諷刺作品を読めば、そのように諷刺の対象になるような人物や地位に陥りたくないと反省を促されるだけの強い効果をもっている。

諷刺は作者の個人的な憎惡の感情から出發して生み出されるものであることは既に明かなことであるが、人生の惡なる状態が表面的なものではなくて本質的なものであり、作者がとうていそれと妥協出来ない位に惡質なものであれば、

それには作者の態度はいよいよ否定的な方向をたどつていくばかりはない。この場合諷刺作家の悪を攻撃しようとする妥協を許さない強硬な否定的態度の中には、人間としての温情が全く影を消して認められないという疑念を感じるかもしれない。もしもそうだと仮定するならば、諷刺作家の非情は人生の悪にたいして、にくしみの感情をかきたゞしめなかつたであらうし、ヒューマニティを喪失した諷刺家の不幸は覆うべくもないであらう。しかしながらこの非情性は、既に経験を通して吸収されてしまつている情緒による裏付けのある非情なのである。人生の悪にたいする諷刺家の強硬なる否定的精神は、人生の悪をしりぞけて善を愛し正しきに味方しようとする人間的な自覚の上にたつものであることを想起するならば肯定されることである。作者が人生の悪にたいして最初に感じた個人的な感情は、作者の特殊な個人的感情であつて、そして作者のこの特殊な個人的感情を惹き起したところの対象も特殊な対象である。このような特殊な個人感情や特殊な対象が、作者の意識のなかで、ヒューマニズムをおして普遍性をあたえられ、高められて、具象化され表現されたときには、既に普遍化された感情であり対象である。諷刺家の仕事は、あらゆる文学の領域においても言えることであるが、特殊な個人感情やこの個人感情を惹き起した特殊な対象を普遍化することになり、諷刺作品はこの特殊な対象である人生の悪を普遍化し高め芸術的に創造したものであると言えよう。即ち Humbert Wolfe がその著 *Notes on English Verse Satire* に於いて、

“For as it is the satirists' misfortune to be withdrawn from the ordinary humanities, so it is his business to be general.” (P. 10)

と言つてるように、諷刺作家は普遍的な性格をもち、対象を普遍化しようとする態度をとるものでなければならぬ。単に特殊な対象を特殊な個人的感情でもつて非難攻撃しても、それはただ嘲笑、罵倒の域より一步も出ないものであつて、諷刺文学とは言えない。このような嘲笑や罵倒はただ非難攻撃の手段の表現にすぎない。既に述べたように、諷刺家が人生の悪にたいする憎悪の感情を形象化するための表現手段として用いる主要な手段

は、皮肉、諷諭、諷刺詩、戯文、毒舌、機智、諧謔などがあるが、これらの表現形式は、単なる嘲笑などに終るのところが、諷刺的な要素をもち、諷刺的な効果を表現出来るところの形式である。諷刺文学の本質を更に解明するために、次にこれらの諷刺的な要素をそなえたいくつかの表現形式について検討してみよう。

(四)

人生を批判する機能をもっている Irony (皮肉) というものが、いかなるものであるかということ定義づけようとすることは、詩を定義づけることと同じ様に困難なことがらである。Irony は、ギリシヤ人の文学、彼等の生活態度全体に皮肉味がつけられていたギリシヤ人とともに始り、彼等によつて完全なものにされ、多くの方面に用いられたという点からして、Irony を研究しようとする場合には、ギリシヤ人にさかのぼらなければならぬ。彼等によつて Ironia と言われたこの言葉が、現代の Irony という言葉で意味するものになるにいたつたに就いては、随分永い時間的な経過を経た。Hironia は初期の作家にはみうけられない。Eiron という言葉ですら、ギリシヤの喜劇詩人 Aristophanes (B. C. 450?—385?) が初めて使用した程であるらしい。Eiron が喜劇をおして文学に現れた当時は、「狡猾な」(Cunning)、「陰險な」(Wily)、「悪賢い」(Sly) といったような意味で、卑俗な言葉としてみられていたらしい。古代文学においては、文芸批評が存在しなかつたので、Irony は文学作品の中で余り問題にはされなかつた。今日使われているような意味を Irony に与えたのは、Socrates (B. C. 469—399) であるが、彼は Irony を用いた最初の人ではなかつた。Irony は諷刺家のうちでも、懐疑哲学者たちを鼓舞する精神であつて、晦澁の世界に理性の空氣と光をそそぎ込んで、そこに発芽した迷信を消毒したのである。彼等にとつては、Irony というものは言葉を剣にする策略ではなかつた。そして Allegory と殆んど同じような性質で、諷刺のように激しい攻撃態度をとらない。すこぶる慎重で抜目なくしかも非社会性でない。客観にたいする正しい批判性もひそんでいる。Irony が個人を対象とするならば諷刺は

社説を對象とする。次に Ironical な色彩を帯びた物語をあげてみる。

A woman, who had recently buried her husband, used to go daily to his tomb and make lamentation. A man who was ploughing not far from the tomb fell into a desire of the woman, and, leaving his oxen, went himself also to the tomb and, sitting down, lamented along with the woman. Upon her asking why he too was making this moan, "Because," says he, "I have buried a charming wife, and whenever I weep I feel a lightening of the burthen." Says she, "That is just my case too." Says he, "If, then, we are involved in the same misfortune, why not make a match of it? I will love you just like her, and do you love me in return as you loved your husband." This persuaded the woman, and they did make a match of it. In the meantime came a thief, and loosed the cattle, and drove them off. And the man on his return, failing to find the oxen, proceeded to beat his breast and groan very vehemently. Then came the woman also and, finding him deploring his case, exclaimed, "In tears again?" "This time," said the fellow, "the tears are genuine."

この物語には狡猾な農夫の最初の意図が全く反対の結果となつて現わされていることがみられる。Irony は或る行為や事件を形象化しようとする作者の意識内にある当然の意図が全く予期しない反対の行為や事件や言葉ばかりで形象化されることである。或は痛の権威者が痛の病氣で死んだなどという事件の形象化の表現方法とか、また愚鈍な人物を愚鈍という言葉で直接に表現しないで、その逆の「賢いね」などの言葉をもつて表現するように、作者が發表しようとする意図している意味が実際に言葉を用いて表現されるときには、反対の形をかりて話されるというような話し方に Irony はみとめられる。Irony は普通、あてこすり、或はいやみ、ひやかしなどの形態をとり、罵倒や軽蔑を込めかすために、賞讃の意を表す表現が用いられるのである。

Lampoon (諷刺詩、落首) は茶目つ氣でもつて人の欠点を非難攻撃しようとするものであつて、落首家の手口といふものは、鍵穴からそつと覗いて偷み聞きしたりつゝいたりするといつた手口で、人の弱点をつこうとするその動機も概ね個人的で、人目を忍んだほんの一次的なものである。社会の道徳が墮落した時代に、この Lampoon は榮え、イギリスの王政復古時代には最盛をきわめた。諷刺とこの Lampoon との關係については、Humbert Wolfe が、

“Its relation to satire is that of the pun to humour.” (*Notes on English Verse Satire*, P. 16)

と書いてゐるが、Satire にたゞする Lampoon の關係は Humour にたゞする Pun (洒落) の關係に等しい。Parody は或る作家の特徴を捉えてそれを模倣して諷刺または嘲弄的に作り替へた戯文である。模倣の限界を越えて、それが破壊的限界に達すると諷刺になつてしまふ。文学において仰々しく誇張した内容の空虚な言葉や文章ほど、究局において悪性のもは他にないのである。諷刺の眞の目的はこのような悪口雜言をすつば抜くことである。しかしながら Parody は対象を嫌うという最初の意圖からされて、対象を称讃しようとする結果になつてしまふことが非常に多いのであつて、それ故客間の花火でもあつてよゝよのような社交的な作品になつてしまふことがある。Humbert Wolfe が、

“It must be dismissed therefore as a drawing-room fireworks, that may be let off in the presence of young children without damage to feelings or furniture. But satire so used would blow the house down.” (*Op. cit.* P. 7)

と書いてゐるが、Parody のこういう花火的な性質に比較すると、諷刺はもつと強力な爆撃の性質をもつてゐるとみてよいだらう。

Allegory (諷諭) は、或る意圖した目的をはたすために、他の物を表現手段として用ひ、比喩的に表す方法である。これは Cervantes とか Samuel Butler とか Dean Swift などの諷刺家が好んで用ゐる趣向であるが、新約聖書の中

たゞくの寓話があるところごとく、Allegory は諷刺家だけの特別な領土でもない。その果している効果は殆んど諷刺の果している効果と変らない。しかしながら諷刺は吾々の人生の中の対象を否定的に把握し、非難攻撃の精神を効果的に形象化しようとするものであるが、Allegory は諷刺のように必ずしも攻撃的な態度をとらないで、教訓的なまた説明的な性質をもつてあり、感情よりも智力に訴えようとする。

Burlesque (滑稽諷刺)には、諷刺のもつている目的や武器と類似したものが使用されるが、諷刺にみるような社会悪に刺戟された憎悪、憤怒、またかなしみの感情といったものはひそまない。機智と笑いとにさへえられて喜劇的な要素を高めようとする。その笑いは社会悪を面白可笑しく嘲弄して、その束縛からはなれたたのしく起る笑いである。Edgar Johnson はその著 *A Treasury of Satire* に於て、

“Playfulness may be the voice of laughing anger or gayspirited seriousness. Playfulness may be a strategy, a weapon, a disguise. Satiric playfulness may thus serve to discount the very exaggeration that was essential for throwing the highlight upon a vital flaw. So employed, burlesque is one of the most powerful weapons of satire.” (P. 19)

と言っている。ところが諷刺の笑いは、諷刺が社会の不正を憎くみ批判的な否定的態度をとつて、厳格に社会の現実と対立しようとする怒りの感情を効果的に形象化しようとするものであるからして、たとえそれが機智や笑いにさへえられていようとも、その笑いはにががしいものであつて、Burlesque にみられるような面白可笑しい笑いとはならない。

Humour (諧謔)は、社会の不正、悪徳にたいして諷刺のようにきびしい否定的な立場に立たないで、社会の不正にたいして一応肯定的な立場、即ち比較的寛大なる立場に立つて、機智と笑いにさへえられながら、悪にたいするにくしみの感情を形象化しようとする創作態度であり、そして形象化された効果である。Claude M. Fuess がその著 *Lord*

Byron as a Satirist in Verse に於いて、諷刺精神について、

“Ultimately the single indispensable element of the satiric spirit is the wish to deny, rebuke, or destroy.” (P. 3)

と言っているが、人生の悪にたいする諷刺の批判性は鋭く強大であつて、そして否定的であるからして、諷刺は理智的な針でもつて攻撃しつき刺し矯正する。之に反して Humour は、人間の愚行や弱点にたいするその批判性は諷刺のそれのように鋭くなくて弱いものであり、そして肯定的であるからして、同情的な態度をとり、情緒的に涙と笑いの効果とでもつて和解させようとする。しかしながら既に検討してきた Irony, Lampoon, Parody, Allegory, Burlesque などが、いづれも諷刺の随伴物であるのと同じように、勿論この Humour も諷刺にたいして随伴的な立場をとる。しかしながらその價值については多くの異つた意見がある。諷刺の最も美しい最も微妙な味が上品な諧謔の言葉や行爲の中にあるとか、また不正にたいする笑いを設定することが諷刺のとるべき正道ではなく、諷刺は人生の悪から正しい人達を守り、また悪の及ぼす害悪の影響の何たるかを示すために、不道德な人間を非難嘲笑の対象として暴露しなければならぬという意見もある。諷刺のこのような非難攻撃がただ罵倒的なものになつてしまつて Humour が欠けると、その非難嘲笑は毒舌に陥つてしまふ。Humour は機智に比較して軽い浮れた調子があり、それはいたづらつぽい全くのたはごとであるかもしれない。Edgar Johnson は

“It is indifferent to whether its fun is anchored in reality or adrift in fantasy.” (*Op. cit.* P. 32)

と言つてゐるが、Humour は現実の対象を分析してみたり、批判したりするよりも、それ自身がかもし出す興奮、象徴、勇氣をたのしむという傾向がある。

Wit (機智) は現実の対象にびたりと眼をつけ、人生の善、悪を識別する。そしてむしろ同情的な寛大な態度で対象の中にあつて和解の笑いを創り出そうとする Humour とはちがつて、Wit は決して対象とともに沈み込んだりしない

い。Wit は常に真実ととりくみ、その目指すところの標準は人生の真理であり精神の健全さである。それ故 Wit は諷刺の本當の道具であるけれども、Humour は吾々を諷刺家の網の中に誘い込むところの単なるおびきよせの餌、或は誘いにすぎないということができる。諷刺家は吾々をとりえてしまうと、吾々の虚栄、偽善、愚行などを食つて腹をふくらし、吾々には理性の御馳走でおかえしをしてくれるのである。これが諷刺における Wit のもつ機能である。それ故、実は Wit なるものは必ずしも面白いものとは限らない。真面目な Wit というものは真実のうえに投射された強力なサーチャイトにすぎないかもしれない。迷妄を消散させ、臆説をきどごかし、同意を強要させる。Wit は情緒に頭をさけることがない、あらゆるものを理性の世界にひっぱつていく。

(五)

すでに諷刺的な効果を表現出来るいくつかの形式を考察することによつて、諷刺の本質解明へと一歩接近したものと思ふ。

“Satire is the product of the cool mind; there is not flame in it, but steel tempered by flame.”
(Humbert Wolfe: *Notes on English Verse Satire*. P. 76)

こゝに引用した Wolfe の諷刺についての見解によつても明かなように、諷刺家は感情的な情熱とか涙におぼれることなく、冷静な理性的精神をもつていなければならぬ。そしてこの冷たい理性は情緒の園内を浸透してきたえられてきたものであつて、それは恰も鋭いそして堅い鋼鉄とでもいつたものになつてゐる。このような精神をおびして創造された作品であればこそ、諷刺が寸鉄人の肺腑を刺すのである。Wolfe はまた

“It is the immediate result not acceptance but of refusal.” (*Op. cit.* P. 76)

とも述べているが、諷刺は人生の不正、非行にたいして、即ち現実的対象にたいして諷刺家が否定的批判的な立場をと

つた結果の所産である、ということも明瞭である。Claude M. Fuess は

“In general,……, the essential feature of the satiric spirit, wherever found, is its disposition to tear down and destroy.” (*Op. cit.* P. 2)

と述べている。諷刺家にとつては困難ではあるが、しかし諷刺家として立つか否かを決定するところの鍵は、この現実の対象を如何に批判しそして否定的態度をとるかということである。したがつて、優れた諷刺家であるか否かは、その諷刺家の対象否定の態度、即ち彼が破壊してしまふものに左右されるのであつて、彼がつくり上げるものからではない。その否定、破壊そのものは永遠の意義をもつかもしれない。凡ての作家達のうちで諷刺作家が批評家に最も近い、というのは諷刺作家の仕事は知的精神 (*mind*) をもつてするのであつて、情緒的感情 (*heart*) をもつてするのではない。またこの知的精神と情緒的感情を結合したものをもつてするでもない。諷刺的であるということは、否定的な精神であつて、諷刺家は常に一種の破壊的な動機に駆られ、そして人生の悪を他の形をかりて非難することが彼の職能である。この点から判断すると、諷刺は破壊的批評であつて、そこに人間の不正、無知、誤りなどが嚴格に非難されるところの詩とも言うべきものである。

諷刺家が毒舌をはいたり、罵倒をやつたり、また時には犠牲者を摘発したりするが、諷刺家の道化した諷刺から、辛辣な刺すような諷刺にみとめられるところの一つの共通要素は、批判性 (*criticism*) である。罪のない弱い者や苦しんでいる者、不幸な人々を諷刺出来ないということ、また残酷な父親にたいして反抗することの出来ないような無力な子供にたいして、誰も諷刺の対象としてとりあへることの出来ないという事実は、その事実の底にひそんでいる善悪の本質を明確に批判する結果に他ならない。しかしながら、諷刺は勝ち誇つた傲慢な悪や自尊心にたいして、またかくされた不合理や社会的習慣として思慮もなく盲目的にうけ入れられている不正にたいしては、処をとわず諷刺の矢をはなつ。このように悪の化の皮を剥ぐという諷刺のこの効果は重要なことである。即ち Edgar Johnson は

"This enables us to say, I think, what satire really is. It is criticism getting around or overcoming an obstacle." (*Op. cit.* P. 9)

と述べ、また彼は

"The essence of satire," write G. K. Chesterton, "is that it perceives some absurdity inherent in the logic of some position, and that it draws the absurdity out and isolates it, so that all can see it." (*Op. cit.* P. 19)

と G. K. Chesterton の見解を挙げて、諷刺の性格を明かにしている。諷刺は覆えし、不敬で、勇敢で、へきえきしない。その笑いは殆んどさげすみの嘲笑をかゝらない。

諷刺は二つの主要な方法をもつている。たとえば棍棒などで物凄く打ち叩くといったように、猛烈に非難攻撃するという直接諷刺と、直接にはぶつからないで殷懃な外交的なやり方で、ひそかに破壊しようとする婉曲な諷刺、即ち間接諷刺である。後者の場合には恰も友達か保護者といった態度を装つて狡猾に破壊するのである。直接諷刺は間接諷刺に比較すると、そつと秘かに毒薬入りの菓子を贈られるよりも、おまじらに打擲される方が、憤りの感情をはつきりと表現するのと同じように、形象化された憎悪の感情の表現は非常に明瞭なのである。それ故直接諷刺において最も簡単な攻撃武器は、論理によつてさゝえられた力強い毒舌、即ち言葉に仕込まれた棍棒、戩斧であるということもなづかれるであろう。またそれと同時に、間接諷刺において最も強力な手だての一つは、一種のしらばつくれであるところの Irony であることも明かである。

諷刺は吾々人間のまた吾々社会の無智や悪徳を啓蒙してくれる有力な主体であり、行為者である。吾々の主観を無条件に没入させ、吾々の知性をくもらして、非論理的にするところの吾々の情緒の世界が、もし啓蒙されて無智のくらやみがひらかれるとするならば、その光をさし入れてくれるものは恐らく諷刺であろう。ヒューマニテイと人生それ自

身の批判に深まつていくところの諷刺の偉大な基準は、常に真理であり精神の健全さであるからである。浮薄、淺薄、不真面目は諷刺家にとつてはまさに命取りである。偉大な諷刺家は真直ぐに、遠く、そして深く客觀を觀察する。したがつて諷刺は鋭い冷徹な知性をとをした客觀の否定的批判によつて与えられた激しい怒りが、機智と笑いにさゝえられて形象化されるところの非情の世界であり、知性の冷光である。